

◆第11話◆ オーラルヒストリー

自校史編纂は、文書資料をその基礎的資料として使用する。これは、どの自校史でも同じことである。この文書資料、つまり紙による資料のほかに画像、映像及び音声による資料が自校史編纂対象になってきた。これも疑義が生じないところである。

今回は、これらのうちの「音声」を取り上げることにした。「音声」というと聊か範囲が広い。今回の対象は、「語り部資料」というものである。

世間一般には、オーラルヒストリーは邪道だという考えがあることは確かである。人の記憶は、あてにならないというのも本当のことである。では、オーラルヒストリーは、正史を編纂する上で役に立たないというのは極端であろう。

大学の性格としては、人材養成という目的がひとつある。この目的がどのように達成されてきたかを知るには、物故していない限り、当の本人の聞き取りがひとつの手段といえる。また、大学の経営についても当事者が健在であれば、聞き取りをすることで、文書資料に現れた内容に付加価値が生まれる。人間の記憶は、良いにつけ悪きにつけ過大化したり過小化したりする。この点をわきまえれば、史料的な価値が生まれる。経営経験者や卒業生への聞き取りは、語りの展開から思わぬ副産物があるかも知れない。それは、埋没し、或いは忘れられた人物の発掘があり得るのだ。筆者の経験を挙げれば、数多くいる教員の中で、我が国に多大な貢献をした人が発見できるなど、また、卒業生がその部下として働いていたというビックリする話にまで到達する。また、伝説と化した卒業生の話題からあの人もいた、などといってかなり広い範囲に自校史対象人物が拡大していく。

自校史を編纂する手法は、ひとつではない。今回取り上げたテーマは、その一例である。オーラルヒストリーは、個人の聞き取り作業が一般的であるが、座談会という方法もある。座を囲む出席者がどういう構成員かで、その後の展開に差が出る。つまり、自校史を編纂するための座談会は、思い出話である。年代を超えて、出席者が語り合えれば、その効果の増幅度は限りないものになるだろう。

そこには、前述しているが新発見の人、出来事の再認識や裏話を得ることが出来る。記述しようとしている教員の素顔が垣間見えるかもしれない。まさに、既定の認識は、聞き取りによって破壊されるかもしれないし、新発見からもっと高評価へとつながるかもしれない。オーラルヒストリーは、先稿に記した「文書による史資料」と並んで、自校史編纂にとって重要な位置を占めることだろう。

オーラルストーリーは、そのままでは一次資料と同格とはならない。必ず、検証をすることによって、史料となりうるのである。

聞き取りをした音源は、反訳の上、紀要掲載や冊子にまとめておくと、後で便利ツールになる。座談会も同様である。